

万葉集 3773 番歌の「同じこと」の解釈について

竹生 政資*

An Interpretation of the Third Phrase of the 3773th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU

要 旨

万葉集 3773 番歌は、都にいる妻が越前国に配流になった夫に贈った歌で「君がむた 行かましものを 同じこと 後れて居れど 良きこともなし」というものである。通説では「あなたと一緒にいけばよかったのに、同じ事です、後に残っていてもいいことなどありません」と解されている。問題があるのは第三句「同じこと」の解釈である。この歌はいったい何と何が「同じこと」だと言うのだろうか。通説では、妻が一人で都に残って辛い思いをしているのと、夫が越前国に配流になって辛い思いをしているのが「同じこと」だと解されている。しかし、妻は配流の経験などなく、その辛さがわからうはずもないのに、なぜ都に一人である自分の辛さと配流先の夫の辛さを比較して「同じこと」だと軽々しく言うのだろうか。通説はこの点に疑問があるのである。したがって、何と何が同じことなのか、改めて再検討してみる必要がある。

1. はじめに

万葉集巻十五の最後に、越前国に配流になった中臣朝臣宅守と都に一人で残された妻の狭野茅(弟)上娘子との贈答歌が 63 首(3723~3785 番歌)収められている。万葉集 3773 番歌はその中の一つで、妻から夫の宅守へ贈った歌である。本論文の目的は、要旨でも述べたように、この歌の第三句「同じこと」が、いったい何と何が同じことなのか、その意味について再検討してみることである。まず歌の内容(訓読文と原文)を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう[1]。

15/3773 君がむた 行かましものを 同じこと 後れて居れど 良きこともなし

【原文】 君我牟多 由可麻之毛能乎 於奈自許等 於久礼互乎礼杼 与伎許等毛奈之

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている現代語訳と注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

*佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)
公開鍵指紋: 11C0 DBB6 369C DB72 DD3A B122 EF6B 5B5E B99A C2E7

① 新日本古典文学大系^[1]

【現代語訳】あなたと一緒にいけばよかったのに。同じ事です、後に残っていてもいいことなどありません。

【注釈】「むた」は、と共にの意。「共」の字を用いる例が多い。「波のむた（共）」（一三一）。「神のむた（共）」（一八〇四）。

② 新編日本古典文学全集^[2]

【現代語訳】あなたと一緒に 行けたらよかったのに 辛さは同じことです 都に残っていても 良いこともありません

【注釈】君がむた——… ガムタは、～と一緒に、の意。○同じこと——あなたが越前に一人でいるのと、淋しいのは同じです、の意。

③ 講談社文庫（中西進）^[3]

【現代語訳】あなたと一緒にいけばよかったものを。同じことだ、後に残っていても、良いことはない。

【注釈】同じこと——今の辛さは配流の辛さと。

④ 万葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【現代語訳】あなたと一緒に行くのだつたに。苦しいことは同じよ。あなたに後れて京に残つてあてもよい事はありません。

【注釈】君が共行かましものを——「むた」は共に（三六六一、二・一三一）。「むた」は「の」をうけるのが常であるが、「加曳我牟多祢牟」（廿・四三二一）の如く「が」をうける例もある。「ましものを」は既出（三五七九）。

同じこと——越前へ下るも、京に残るも苦しい事は同じよ、の意。同じをオヤジ（十四・三四六四）とも云つたがここにオナジとある（四・七四八）。

⑤ 日本古典文学大系^[5]

【現代語訳】あなたと一緒に行くのだつたのに。つらいのは同じことです。あとに残っておりますけれど、都とて少しもよいこともありません。

【注釈】むた——と共に。→三六六一注。○同じこと——越前へ行っても都にいても同じこと。（越前の配所へ行けばつらいだろうが、都にいてもこんなにつらい。）

上に示した五つの先行研究を見ると、現代語訳は五つともほとんど同じであり、また第三句「同じこと」の解釈についてもおおむね同じである。

次の第2節では、先行研究の問題点を指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

まず初めに、前節に示した五つの万葉集注釈書（①～⑤）が第三句「同じこと」についてどのよう

な見解をもっているのかまとめておこう。

- | | |
|----------------|---|
| 新日本古典文学大系 (①) | 言及なし。 |
| 新編日本古典文学全集 (②) | あなたが越前に一人でいるのと、淋しいのは同じです、の意。 |
| 中西進・万葉集 (③) | 今の辛さは配流の辛さと (同じ)。 |
| 澤瀉久孝・万葉集注釈 (④) | 越前へ下るも、京に残るも苦しい事は同じよ、の意。 |
| 日本古典文学大系 (⑤) | 越前へ行っても都にいても同じこと。(越前の配所へ行けばつらいだろうが、都にいてもこんなにつらい。) |

②と③は、夫が越前国で一人辛い思いをしているのと、妻が都に一人残って辛い思いをしているのが「同じこと」だと解している。一方、④と⑤は、もし夫といっしょに越前国に行ったときに妻が経験するであろう苦難と、そのまま一人で都に残った場合の辛さが「同じこと」だと解している。このように二つの解釈には少し違いがあるけれども、いずれも配流先での辛さと都に一人残る辛さが同じであるという点では共通しており、基本的に似た解釈である。なお、①は何と何が同じかについて触れていない。

ところで、上に示したような従来の解釈には疑問がある。というのは、妻は配流の経験などないのに、その辛さがわかろうはずもないのに、なぜ都に一人でいる自分の辛さと配流先の夫の辛さを比較して「同じこと」だと軽々しく断定的に言うのだろうか。この点に疑問があるのである。

この疑問点を別の観点から明らかにするために、彼女が夫に贈った別の歌を見てみよう。

15/3745 命あらば 逢ふこともあらむ 我がゆゑに はだな思ひそ 命だに経ば

この歌が今問題の 3773 番歌よりも前に作られた歌であることは、両者の歌番号の比較から明らかである。彼女は、この歌の中で、夫が生きて再び都に帰れるかどうか、夫の「命の心配」をしている。だとすれば、このように命の危険にさらされている夫に対して、彼女は、都に一人でいる自分の辛さの程度と、夫が配流先で強いられる苦難の程度を比較して、「あなたと私の辛さは同じよ」などと軽々しく断定的に言うだろうか。まともな女が言うこととはとても思えない。このことは、二人の間で交わされた 63 首の贈答歌のうち、彼女から夫へ贈った 23 首の中に、夫の配流先での苦難に言及した歌が一つもないことからわかる。おそらく彼女は、夫の配流先での苦難が自分の想像をはるかに越えるものであることをよく知っており、それゆえ言及がなかったのだと思われる。そのことを裏づける証拠がある。それは夫が彼女に贈った次の歌である。

15/3763 旅といへば ことにそ易き すべもなく 苦しき旅も ことにまさめやも

実は、この歌に関する通説の解釈にはいくつか問題があり、詳細な考察は姉妹編の論文に譲るが[6]、今の目的のためには、この歌の正確な解釈は必要でなく、ただこの歌から「旅(配流)の苦しきはとも言葉で表現できるものではない」という内容を読み取れば十分である。すなわち、夫の宅守は、この歌を通して、妻に「私の旅の苦しきは筆舌に尽くし難いものだ」と訴えているのである。

さて、上に示した 3763 番歌の歌番号に着目すると、この歌が今問題の 3773 番歌よりも前に作られたものであることは明らかである。だとすれば、彼女は、3773 番歌を作る時点で、すでに 3763 番歌

を見て「配流先での夫の苦難が筆舌に尽くし難いものであること」をしっかりと感じ取っているはずである。このような状況で、果たして彼女は「私が都に一人である淋しさ・辛さは、配流先でのあなたの辛さと同じよ」と軽々しい内容の歌を作り、夫に贈ったりするだろうか。これが通説に対する基本的な疑問である。

3. 万葉集 3773 番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈結果を示し、後でその根拠について述べることにしよう。まず 3773 番歌の訓読、直訳、意識を示す。

【訓読】 君がむた 行かましものを 同じこと 後れて居れど 良きこともなし

【直訳】 (できることなら) あなたといっしょに行きたいのに。(このことは、あなたにとっても) 同じことです。こうして都に私一人が残っていても、良いこともありません。

【意識】 もし許されるものならば、あなたといっしょに越前国に付いて行きたいのに... 私があなたといっしょに越前国に行くことは、あなただっぴ私と同じように望んでいるはずですが... こうして私一人だけ都に残っていても、良いこともありません。

上に示した新しい解釈のポイントは、この歌の第三句「同じこと」を、彼女が夫に付いていっしょに越前国に行くことを(彼女はもちろん)夫も「同じように」望んでいると解する点である。

通説は、夫が配流先で辛い思いをしているのと、彼女が都に一人に残って辛い思いをしているのが「同じ」だと解するが、この解釈に問題があることはすでに前節で指摘したとおりである。だとすれば、通説の考え方のほかに考えられるのは、「同じこと」がこの歌のひとつ前に詠まれた歌の内容を参照しているか、あるいはこの歌の文脈の中だけで自然に推測できる内容のものか、いずれかの可能性だけである。そこでまず、この歌の直前に詠まれた歌を見ると、

15/3772 帰り来る 人来たれりと 言ひしかば ほとほと死にき 君かと思ひて

というものであり、この歌が 3773 番歌の「同じこと」に関係している可能性はない。したがって、残る可能性としては、3773 番歌の初句と第二句で述べてられている内容「君がむた行かましもの」に対して第三句で「同じこと」と言っている可能性だけである。そこで、この歌が「夫婦」間でやりとりされた歌であることを考慮すると、この二人の夫婦が共有している「同じ気持ち」とは「(できることなら)二人でいっしょに越前国に行きたいと願う気持ち」だと考えられる。

万葉集卷十五の巻頭目録の説明によれば ([1], p.389)、

中臣朝臣宅守の、蔵部の女孺狭野弟上娘子を娶りし時に、勅して流罪に断じ、越前国に配しき。

ここに夫婦別るることの易く会ふことの難きを相嘆き、各慟む情を陳べて贈答せし歌六十三首。

とあり、宅守と娘子は「夫婦」である。であれば、二人が夫婦としていっしょに居たいと願うのは当然であり、ただ今の状況では、宅守は罪人であり、宅守が越前国に行くのを留めることはできない。もし二人がいっしょに居れる可能性があるとすれば、娘子が宅守といっしょに越前国へ付いて行くこ

とだけである。3773 番歌はこの可能性を念頭において詠まれたものだと考えられる。すなわち、二人がいっしょに居れる唯一の可能性として娘子が「(もし可能なら) あなたといっしょに越前国へ付いて行きたい」と願い、このことを夫も当然「同じように」望んでいるはずだと彼女が確信をもって言い切ったのが第三句「同じこと」という表現であろう。

以上のことをまとめると、この歌は、反実仮想の内容であり、

もし可能であるならば、私にとっても、あなたにとっても、私があなといっしょに配流先の越前国へ付いて行くこと、これが二人にとって一番の願いです... しかし、現実にはそれさえもかなわないのが残念でなりません。

という娘子の切ない気持ちを詠んだものだと思われる。

4. おわりに

本論文では、万葉集3773番歌の第三句「同じこと」について、いったい何と何が同じなのかという点に焦点をあてて再検討を行った。その結果、これまで通説で行われてきたように、妻が一人で都にいる辛さと配流先の夫の辛さが「同じ」と解するのではなく、初句と第二句で述べられている「もし可能であるならば夫といっしょに配流先の越前国に行きたい」という妻の願いが、夫にとっても「同じ」願いであるとする解釈に導かれた。このような解釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「万葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.465、2002 年。
- [2] 「万葉集④」、新編日本古典文学全集、小学館、pp.79、1996 年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注 (三)」、中西進、講談社文庫、pp.341-342、1980 年。
- [4] 「万葉集注釋 卷第十五」、澤瀉久孝、中央公論社、p.175、1965 年。
- [5] 「万葉集 四」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.106-107、1962 年。
- [6] 竹生政資、万葉集 3743 番歌と 3763 番歌の解釈について、<http://www.manyo-world.com/>、pp.1-8、2011 年。